

気候変動 現場で学ぶ「備え」

ベトナム人の学生ら 県内各地で研修

ベトナム・ハノイにある日越大学の修士課程で気候変動を学ぶベトナム人の学生らが、県内各地を回って防災や復興の取り組みを学んでいる。以前から計画されていた訪日の研修だが、台風19号の被災と時期が重なった。学生らは「日本の技術や知恵を母国で生かしたい」と話し、気候変動への備えを实地で学ぶ機会となっているようだ。



台風19号被災・知恵 「母国に伝えたい」

日越大は、日本とベトナム両政府の合意に基づき、東京大や筑波大、茨城大といった日本の大学とベトナム国家大ハノイ校が協力して2016年に開学した。来日しているのは、茨城大が幹事校としてカリキュラムの作成と教員派遣をしている「気候変動・開発プログラム」の修士2年生20人と教員2人だ。

6日には常総市を訪れ、4年前の「常総水害」で決壊した鬼怒川の堤防を見学。国土交通省下館河川事務所の担当者から、当時の様子や現在進められている河川整備の計画などについて説明を受けた。現場近くで河川の流量調査などを行う「新星コンサルタント」では、災害時のドローン(小型無人飛行機)の活用法などを学んだ。プログラム専任教員のグエン・ヴァン・クアンさん

(39)は「国土が狭くて山がちなベトナムでは、地理的に似ている日本の防災対策に関心が高い。今回、実地で聞き取るよい機会になっている」と話す。

一行は10月28日の来日後、つくば市の国立防災科学技術研究所や国立環境研究所などで研修。台風19号で浸水被害を受けた水戸市内でボランティア活動にも参加した。

学生のグエン・ホアイ・トゥーさん(24)は「私の出身地は沿岸部において自然災害が多い場所。災害が起こる前にとるべき行動を決めておく『マイタイムライン』など、すぐに採り入れられるし効果的だと思つので、帰国したら周りに伝えたい」と話した。

学生らは今月中旬以降に順次帰国するが、7人は12月中旬まで残って、修士論文に向けた研究を進める予定という。

(庄司直樹)

講義を熱心に聞く日越大の学生たち。ベトナム人が大半だが、ミャンマーやナイジェリアからの学生もいる。常総市篠山